

## 付記 シーボルト台風について

## 根 本 順 吉\*

昨年 8 月 25 日、気象庁 研修所で開かれた第 6 回気象学史と気象教育についての月例会において、筆者は高橋博士が過去 300 年間における最大の台風であると推定された文政 11 年 8 月 9 日 (1828 年 9 月 17 日) の台風は、有名なシーボルト事件のきっかけをつくつた台風であり、この台風を「シーボルト台風」とよぶことを提案した(1)。この台風については、すでにその詳細をシーボルトの手紙を引用して紹介した永山盛善氏の研究があり(2)、これによると夜半にシーボルトの自宅二階のくずれ落ちる寸前の観測は次のようである。

「気圧計 28 インチ 1 (951.6 mb), 寒暖計 77°F, Saussure 製の湿度計 97%, 南東の台風, しかるに前日朝は気圧計 29 インチ 73 (1006.7 mb), 寒暖計 76°F, 湿度計 89%, 東の微風, 晴の記録なり”

永山氏がシーボルトの記録や日本気象史料により推定したところによると、この台風は長崎の南西海上より、長崎のすぐ西方に上陸、佐賀、福岡、下関近傍を通過して日本海に入ったものと思われ、長崎ではかなり大きい高潮を伴ったことがわかる。28 インチ 1 というのを、読み取ったナマの値として海面の値になおすと 948 mb となり、これは長崎測候所創立以来の最低記録 950.6 mb (1942 年 8 月 27 日) よりも低い値となっている。

その後、この台風について二三の興味ある資料を得たので、ここにとりまとめて紹介しておきたい。

1. 藤森成吉氏の戯曲に「シーボルト夜話」というのがある(3)、これは 1935 年 12 月に名古屋で前進座により初演されたものである。この第 1 幕は文政 11 年 8 月 10 日、風雨の夜にあてられており、場所は長崎出島、蘭館内の医官舎宅 2 階、シーボルトの研究室、登場人物はシーボルト、お滝、おいね、ピュルヘル、高良齋、二宮敬作、高野長英、戸塚静海、川原慶賀、熊吉、黒人、シロ (日本産狆) で、シーボルトの帰国寸前の縮迫せる事態のうちに、台風によるコルネリウス・ハウトマン号の座礁が黒人によって報せられるまでを第 1 幕とすとする。幕ぎれの一節を引用してみよう。

二宮 (シーボルトえ) 先生、ハウトマン号の灯が見えませんか?

シーボルト さう。どうしたんダロ?

硝子戸破れるばかりに鳴りひびく。

熊吉 (狆と一しょに飛び込んで来て) 先生、大へんです! 黒ん坊部屋や砂糖蔵が倒れました。

シーボルト なに、ほんとか?

熊吉 ほんとしてす

狆しきりに吠えながら、飛びまはる。

お滝 (おいねを抱きながら駆け出して来て) ままこはいこと!

シーボルト (おいねを抱き取って門人たちえ) 諸君、気圧計や寒暖計を見てクダサイ。

二宮 はい! (早速室の片隅へ行って検べて) 気圧計二十八度一分。寒暖計華氏七十七度、湿度計九十七度!

シーボルト ほう、書きつけておいてクダサイ。

戸塚 こんな暴風雨は珍しいですね。

シーボルト いい記録ダ。……この子を見てみてクダサイ。チョット行って来るから。(戸塚においねを渡し出てゆかうとする)

そこへ、ぶつかるばかりにして黒人が駆け込んで来る。

黒人 ドクトルさま! 大へん。帆前船一コルネリウス、ハウトマン、波で碇の、……碇のつな切れて……。

シーボルト (青くなって) ひっくりかへったのか?

黒人 (首を振って) いえ、をかへ乗りあげました。

高 そいつは大へんだ!

二宮 何てことになったんだ!

シーボルト 行ってみよう!

黒人 (押しとめて) ダメ、ダメ! 瓦降る、家倒れる。とてもアブナイ。

シーボルト (払いのけながら) ともかくカピタンのとこへ行って……。

途端、また近くの二階家でも潰れるらしい轟然たる物音。サンデリアも床も、地震のやうに震動する。

一急速に幕一

この戯曲によると二宮敬作が命ぜられて観測したことになっているが、二宮はシーボルトの教えをうけ富士山の気圧計による測高を行なった人であり(2)、観測値などは実際の資料によってかなりリアルにえがかれていることがわかる。

2. シーボルト台風の時の災害の記録は古くは田口竜

\* Junkichi Nemoto 気象庁予報部長期予報管理官付

雄氏の集められたものがあるが(4)、新刊の荒川氏等の『日本高潮史料』(5)には、これにさらに広い地域からの史料が追加されていて、この台風がいかに大規模な被害を与えたかがわかるのである。

荒川博士の追加した資料のうち〔佐賀県災害誌〕による部分とはくに興味があるが(同書 196~197 頁)、ここに紹介する新しい資料は高橋博士の研究が新聞に報道された反響として、福岡県の木下喜作氏(福岡銀行調査室長)よりお知らせいただいたものである。これは佐賀藩の儒者中村嘉田(1777~1830)の著書『花竹堂詩文抄』坤の巻(下巻)に記述されたものであり(6)。この本の乾の巻(上巻)の序文は文政戊子(1828)となっている。幸い木下氏のご好意により、明治25年に復刻した同書を見ることができた。

これによると、この時の台風の状況は『前大風』という詩にのべられているが、この詩の前にやや長い序があって、主としてこの台風の被害が数字をあげて詳説されている。この部分を荒川等の『日本高潮史料』に掲載された〔佐賀県災害誌〕の記録(同書 p.197~198)と比較してみると、重複している怪我人、溺死、横死、焼死、全壊家屋、半壊家等の数字は全く同じなのでここに引用することはさき、ここには主として台風現象そのものを叙した詩文の方を抄録してみよう。

書者且停筆。談者且休言。聽我大風嘆。語長勿厭煩。三更我警覺。有聲聞莫原。得非山嶺顛。無乃天地翻。風自東北吹。盛怒空大谷。捕繫無由施。聽聽逞殘毒。……猛雨急飛矢。盈空与火俱。疑是万燭電。嘯集欺我愚。

(有火如彈丸小大千百与雨交飛於空中時有隕者人或逼視之皆腥而不熱蓋木華海賦所謂陰火及我不知火之属為風所吹颺來而燃於地上之天耳) 回望四野天。焰火燒雲衢。疑是衆寇兵。迸散焚我郭。(此是失火非前文与雨俱者燒之也) 爾時風自南。鬢鬢飄衰髮。步步被吹倒。起行速地震。或怕行如裂。身為石礫殉。莫是天魔戲。勻足疑且信。拳目市坊異。十家九席卷。喬樹斷蓬飛。巨石彈丸転。隆隆本易折。卓者亦不免。悔吾不布卜。預觀天地撰。巽二及右尤。技倆大低語。当其將大扇。先駭每再三。斷寬飲海北。赤雲夾日南。其衝非不勅。其衰不足擔。誰料今段風。警彭城役。唯解趨穀泗。良平不及策。……

次第東方白。風与驚小定。生徒幸無恙。妻孥幸無恙。霎時瘴於仙。聚問乃生狀。乃生豈不癩。暮年志猶壯。仰

看群飛鳥。折翅仍傷翼。勢窮或投人。戶庭相蘇息。鴉也頗桀驁。決起不量力。力尽軀亦傾。跼跼壁林側。角鷹四五來。鉄骨搏遡風。退豈怒復進。似欲収奇功。渠有俊逸材。耻与風禽同。物微尚自信。安能嘆命窮。

以下、被害者に対する救援、その悲酸なる状況をのべたるのち

嗚呼此大風。古人所來嘗。秦如有此風。秦何作阿房。漢如有此風。漢豈存靈光。天灾固不一。人事自有常。桑榆収未晚。灰石有媧皇。

をもってその結びとしている。この詩のあとに『後大風并序』があり、ここでも被害の数字をあげたのち、前の詩にくらべはるかに短い詩がのせてあるが、台風現象そのものの記述は少いのでこれは省略する。

本書の末尾は『冬至紀喜并序』であり、この方はこの大風後の気候の異常を記録しているように思われる。短いので全文引用しておこう。

灾余。藩大旱十旬。气暖。每如三二月。此日大雨。物不可以終嘆。故受之以喜。

莫謂晴天好。果果出日使人惱。莫謂冬温惡。風解我慄薰里落。灾余民庶麦為天。旱天播種遍野田。十日不雨加以雪。苗枯根腐人数斃。湿雲朝与一陽結。山雨欲徵江雨添。雨是甘露雲五色。垂歲數声暮風前。小傘輕屐出郊望。一辺新青麦盈阡。

最後に貴重な文献の借覧をゆるされた木下喜作氏に深く感謝いたします。

#### 参考文献

- 1) 根本順吉, 1961: シーボルト台風, 自然, Vol. 16, No. 10, p. 47.
- 2) 永山盛善, 1954: 日本測候史上におけるシーボルトの業績, 天気, Vol. 1, No. 4, p. 102~106.
- 3) 藤森成吉, 1936: シーボルト夜話(四幕)新潮 1月号掲載, なおこの戯曲は日本名作戯曲全集第15巻, 1950, 藤森成吉集(北条書店) p. 171~263 に所収.
- 4) 中央気象台・海洋気象台編纂(田口竜雄) 1939: 日本気象史料, p. 206~216.
- 5) 荒川・石田・伊藤編, 1961: 日本高潮史料, p. 178~204.
- 6) 中村嘉田: 花竹堂詩文抄, 筆者の閲覧を許されたものは明治25年(1892)中村成一氏により編輯, 発行, 印刷されたものであり, 大売捌所は東京京橋の東屋堂その他である. 定価金五拾銭.